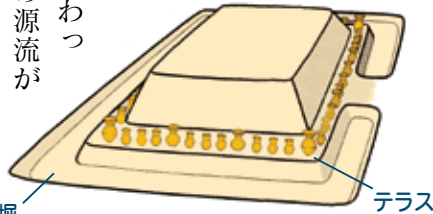


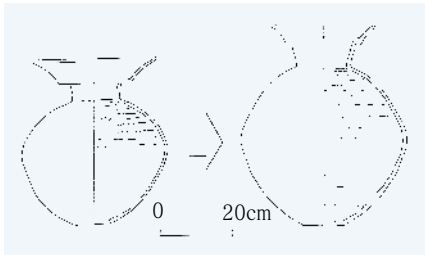
三変稲荷神社の壺形はにわ

小仙波町四丁目の三変稲荷神社古墳は4世紀後葉に作られた一辺20〜25mの方墳で県内でも数少ない前期古墳です。

発掘調査では、墳丘を囲む堀の中から壺形はにわの破片が大量に出土しました。これらは本来、葬送に伴い墳丘のテラスに並べられていたものが転落して壊れたものと考えられます。



三変稲荷神社古墳復元想像図



菅墓古墳の壺形土器(3世紀中葉・左)と、三変稲荷神社古墳の壺型はにわ(4世紀後葉・右)

壺形土器が葬送専用の壺形はにわに変化する中でその形にも変化が起きました。壺が大きく見えるように胴体が長くなるのです。「お墓を立派に見せたい」という古代人の思いが伝わってきます。

たぐさんの壺を並べる変わった葬送儀礼は畿内地方にその源流があります。3世紀中葉に造られ、邪馬台国の女王「卑弥呼」の墓とも考えられている奈良県桜井市の菅墓古墳(前方後円墳・全長272m)では、前方部墳頂に壺形土器の配置が見られます。

鉢物部会



平成8年に発足した同部会は主にハウスで生産される鉢花・花苗の生産者団体です。花は生長のタイミングに応じて温度や水を調整しなければならないので、生育を安定させるのはとても難しいとのこと。天気によっては日に何度もハウス内の温度調整をすることも

あるそうです。「花は愛情を注いだ分だけ、しっかり育ちます」

この時期に市内の直売所などで購入できる主な川越産野菜

ブロッコリー、ホウレンソウ、コマツナ、ニンジン、トマト、サトイモ、キュウリ、菜の花、イチゴ、ネギ、ゴボウ、サニーレタス、カブ、ダイコン

と話すのは会長の宇津木直喜さん(今福)。鉢花や花苗の魅力について伺うと「つぼみから枯れるまで花の持つそれぞれの美しさを楽しむことができることです」と笑顔で答えてくれました。



川越の花は品質が高く、生産されたものはほとんどが市場で流通します。その品質ゆえ、県外の生産者が勉強に来ることがあるという川越の花。生産方法などのノウハウが広がっています。



に完成予定です。鮮やかに復元された社殿が見られる日がい待ち遠しいですね。

梅の香りに誘われて、三芳野神社へ行ってきました。その歴史は古く創立は平安時代の初めとされており、川越城の鎮守として寛永元年(1624)、当時の城主酒井忠勝によって再建されたと考えられています。また、わらべ唄「とおりゃんせ」の発祥の地とも言われています。天神様へと続く細道(参道)を抜けると、現在修復工事が行われている社殿が見えてきました。漆塗りの工事は、既に始まっていて平成31年春に完成予定です。鮮やかに復元された社殿が見られる日がい待ち遠しいですね。



編集後記
どんぐり